『世話支那草』の構造と語彙

木村義之

キーワード：世話支那草　書誌　構造　見出し語　俗語辞書

はじめに

これまで『世話支那草』自体を考察した論考は乏しく、現行の辞書類でも立項するのは『日本古典文学大辞典』（岩波書店）がほとんど唯一のものである。そこには加藤定彦の〈諺を注釈した出版物としては最も早く〉という資料的評価を含む解説がみえる。加藤には近世以前の俚諺資料から広く俚諺および俗語を収集し、五十音順に配列した労作『俚諺大成』[1]があり、同書所収の解説およびその要約である「コトワザの歴史」[2]でも『世話支那草』に関して〈『毛吹草』、『世話焼き草』以後、近世初期には、コトワザ関係書が陸続刊行される。そのほとんどすべてが意義や出典を明らかにしようとしたものである。そして、『世俗諺文』（源為憲編・寛弘四〈一〇〇七〉年成）の流れを汲んでいるものか、『世話支那草』（松浦某編・寛文四〈一六六四〉年成刊）や『斉東俗談』（松浦黙編・貞享二〈一六八五〉年刊）は主として広義の俚諺、いわゆる俗語を考究対象とし、狭義の俚諺（コトワザ）は考究対象のごく一部でしかなかった。〉（引用は後者より）との重要な指摘がある。筆者もこの期の辞書として『斉東俗談』の考察を行った際に、それに先行する『世話支那草』に注目することをのべた。[3] これにもとづき、『世話支那草』と『斉東俗談』の見出し語を比較しながら両書の性格を考える手掛かりを求めた。[4] しかし、『世話支那草』自体の検討は今後、この種の俗語資料を扱う際にまとめておく必要を感じ、改めて『世話支那草』の構造と語彙の考察を中心において、その性格を考えてみることにしたのである。

一　『世話支那草』の書誌

まず、『世話支那草』の受容のされかたを書誌的な面からとらえてみよう。『国書総目録』によれば、現存数は一〇本あり、その内訳は、最も早い刊記を有する寛文四年版が六本、寛文八年版、宝永四年版が各一本、刊年不明のものが二本ある。本としての需要は比較的高かったことがうかがわれる。筆者はこの中で、次の五本を披閲し、同一の版木によるものであることを確認した。[5]

寛文四年版……①国会図書館蔵・一冊本
②静嘉堂文庫蔵・四冊本
③東洋文庫岩崎文庫蔵・三冊本
宝永四年版……④東京国立博物館蔵・三冊本
刊年不明……⑤国会図書館蔵・一冊本

しかし、右のうち最も刊記の早い寛文四年版の①～③でも、テキストとして使用に耐えるものは②のみであった。②は本文に朱引きが多いものの、他に比べて刷りの状態がよいため、本稿ではこれをテキストとした。その他について概要を記せば、①は巻中が欠落して合綴され、使用不能である。もっとも佐村八郎が『国書解題』（明治三三〈一九〇〇〉年　六合館）で〈上巻を言葉部とし、下巻を諺部として、出所を明らかにして精しくその義を解したるもの〉と解題を施しているのは①を指していると思われる。③も巻上一五～六丁の本文部分が下三分の一ほど破損しており、適当ではない。ただし、③は題簽の状態が最もよく、他の破損した題簽の原態を知らせてくれる。『国書総目録』で『世話支那草』の別名としてあげている〈世倭支那草・勢和支那草・世話品草〉は③の題簽に一致する。寛文四年版の後刷りである④・⑤については、④が巻上一六オ以下が落丁している。その点、⑤は無刊記であることと、刷りに多少難のある部分がみえること、目録が各巻ごとに置かれず巻上本文の前に一括して置かれることなどの欠点を除けば、序・目録・本文・跋文が完備されているため、本文自体の検討には支障が少ない。また、巻末に板行目録がある点（後述）、②に準じて使用に耐えるものである。

『世話支那草』（以下、本書と略）が刊行当時に比較的世に迎えられていた状況は現存数によっても想像に難くないが、①～③の同一刊記を有する版でも冊数が異なり、刊行当時の原態については不明な点が多い。江戸時代の書籍目録に本書を求めると、『寛文十年書籍目録』、『寛文十一年書籍目録』、『延宝三年書籍目録』では五冊本とし、分類も〈舞井草紙〉の項にある。また、『貞享二年板広益書籍目録』、『元禄五年刊書籍目録』も五冊本とするが分類は〈物語類〉とある。〈せ　仮名〉と使用字種に注目する分類を行う『元禄九年書籍目録大全』もしかりで、圧倒的に五冊本と記す目録が多い。[6] また、右の⑤付載の〈京都書林板行目録〉では〈世話しな草　世話詞故事　六冊〉との広告もみえる。一方、『延宝三年刊新増書籍目録』では〈四　世話支那草（せわしなぐさ）〉とあり、『天和元年新増書籍目録』下巻〈せ部　仮名〉の項でも〈四　世話支那草（せわしなぐさ）〉となっており、②と一致する情報を提供する目録も存在する。同様に、本の分類についても各目録において安定せず、解題を兼ねる目録として知られる『典籍秦鏡』[7] では〈随筆〉となっている。このことは本書がどのようなジャンルの文献として受容されていたのか、その資料的性格を考える際に記憶しておかなければならない事項であろう。しかし、見出し語を掲げ、註文を与えるという本書の形式はやはり辞書と呼ぶにふさわしく、その意味からいえば、⑤付載の板行目録に記す〈世話詞故事〉が最も的確かと思う。

右の目録のうち、『典籍秦鏡』に記す書誌的事項は簡潔に要点をまとめており、誤りはないので、次に引用して本書の書誌ノー

トとしておこう。

世話支那草　和字平かな交片カナ付　十行　四方卦斗ノ惑也

随筆　序三丁、上目録五丁、上一本文一五丁一本、上二（一六丁卅九終迄）一本、中目録三丁、本文廿四丁終一本、下目録二丁本文卅一丁終一本、〆四本　全四冊

寛文四年甲辰八月日　板本　寺町下本能寺前　八尾勘兵衛板

本書の書誌的概要については『典籍秦鏡』の記述に尽くされているといってよいが、右にみえる丁付け、刊記以外で②に関する筆者の調査を補足してまとめると、

内　題：世倭支那草巻上　筆者：松浦某　体裁：三巻四冊

五針眼装　表紙：藍色。

題　簽：世話品草　中（はがれや破損のないのは巻中のみ。子持枠の貼り題簽で「世話品草　中」とある。巻上は書き題簽で「世話品艸　上」とある。）

寸　法：縦二六二㎜×横一八〇㎜　紙数：墨付き一〇四丁（序・目録・本文・跋）匡郭内：縦二一六㎜×横一六一㎜　無界　毎半丁一〇行で一行は二二～二三字詰

蔵　書　印：静嘉堂蔵書（矩方・陽刻）、松井蔵書（矩円・陽刻＝松井簡治旧蔵）、間蔵書（矩方・陽刻）

函架番号：582-3-22566

のようになる。②は『典籍秦鏡』の巻上を一五丁と一六丁の間で二冊とする記述に合致するので、現存では最も改装の少ないものと判断される。

二　序・跋の検討

次に、本書の執筆動機や執筆態度を序文を手掛かりとして検討しておこう。

本書の筆者は序末に〈夏の季つかた、松浦の某学で思へる軒にしるす〉（序・三ウ）とあるだけで、〈松浦〉という姓を記すにすぎない。〈下官去年の冬、我が　君の供して、あづまのかたへ来りしに、公事のいとまつれ〴〵なりし折は〉（序・二オ）とあることで、職業としては官吏、〈やつがれ不斗卑諺の中理あること、そこともなくかたりければ、其中に弱かふむりもたらざる人の、誠に君がいひしごとく、浮世の諺にいふ処、口にふれ耳に聞なれ侍れば、心にとめぬこそあれ、おほくは拠あるべけれど、吾儕のごとくいとおろかなる輩は東風の馬耳を過る心地し侍るも口惜。せめてはあるじのかしこき心を持て其あらましを筆し給はゞ、おしへてうまざる媒にもならむかし〉とする部分からは、若者の要請に答えるというかたちで本書を執筆しようとした経緯をうかがい知ることができ、著者は比較的年配の人物であることを想像させる。とはいうものの、〈君〉とは誰を指すのか、どこを起点としての〈あづまのかた〉であるかも不明であり、著者を特定できない現状では本文中に出現する〈ある人のかたりしが〉（上・四オ）、〈さる人のかたりしが〉（上・一一オ）、〈或のかたりしは〉（上・二一オ）、〈或人のかたりしは〉（下・二〇ウ）とみえる〈ある人〉〈さる人〉に関しても人物は特定できない。著者の本文中に〈今下官が国のかたはらにも、其遺跡にや営穴のごとくなる処

おほかりしを（中略）殊に西国かた、おほく是あるよし〉（上・三六オ）との手掛かりもみえるが、結局、資料としての位置づけを行うのは本書自体を正確に観察し、調査するという、きわめて基本的なことが要求されることとなるのである。

さて、序文には〈下官答てさることあり、思ずむばいわざれ、とはずんばこたへざれ。夫この国の俗にいふ言、おほかたはみだり言の様なれども、をのづから来歴久しき事もこそと、今我が思ふ処、君がとひにひとしければ、其こゝろざしにも違じなど打うなづきて〉（序・三オ）という著者の俗語観がみえ、〈賤が家居にふり敷ぬる言の葉をさへに理あるをば拾あつめて〉（序・三オ）という語彙収集の態度も表れている。同様のことは跋文にも〈賤山がつのいひならはせる言葉までに、口にまかせてしるしたりければ〉（下・三〇ウ）とみえる。その執筆態度は〈唐の大倭の陳言まで筆の儘にしるしたりけるは〉（序・三オ）と記すが、〈筆の儘に〉は謙辞的な表現であろう。それよりも注目してよいのは〈唐の大倭の陳言まで〉と、和漢の出典に拠を求める姿勢である。これは書名の由来とも関わり、〈世話〉を〈世倭〉とも内題にみえるように、〈倭〉と〈支那〉すなわち和漢対照の意識が表れている。もちろん、〈世話支那〉は〈せわしなし〉との掛詞も意識していたであろうし、〈――草〉も近世初期に盛んであった『はなひ草』『毛吹草』『世話焼草』といった俳諧作法書の命名も念頭にあったはずである。

執筆期間については、跋文に〈時に水無月桂みつる朝より筆をとりて、七夕まつる夕にいたりて終ぬ。其間程久しきにもあらず〉（下・三〇ウ～三一オ）とあるため、これをそのまま信用すれば一か月程度の期間で執筆されたものと考えられる。かかる短期間に項目を選定し、註文を付すためにはかなりの先行文献を参照したことが想像され、逆にいえば先行文献からの影響が小さかったとは考えにくい。したがって、本書が成立するためにどのような文献を素材としたかも、明らかにする必要に迫られるのである。

三　『世話支那草』の構造

（一）見出し・註文の形式

続いて本書の構造を観察してみよう。本書は巻上を「言葉部」、巻中を「言態部」、巻下を「諺部」とする三部構成をなし、巻下の末尾に「附録」が設けられている。この部立ては『節用集』、『下学集』などの通俗辞書からみれば特異な分類であろう。本文ではそれぞれ、〈見出し――註文〉の形式で対応し、ほとんどの見出しにルビが片仮名で付けられる。各部冒頭から一項目ずつ抜き出して示せば、次のような体裁になる。

一　指南〇十八史略に、黄帝軒轅氏の時に、蚩尤といゝしもの悪逆にして（下略）　（上・一オ～ウ）

一　忠言耳にさかふといふ事〇孔子家語に、良薬は口に苦けれども、病に利有（下略）　（中・一オ）

一　万事はゆめといふ事〇昔菅烝相時平の大臣が讒言によりて（下略）　（下・一オ）

右にみえる〈一――〇……〉の形式は各部でほぼ統一されており、〈一〉以下が見出し、〈〇〉以下が註文である。「言態部」と

「諺部」はさらに〈――といふ事／――云事〉の形式が多く、少数ながら〈――と言言／云言／云言〉とするものもある。〈いふ／云／言〉の用字や〈云事／云言／云言〉などの用語の違いには明確な区別意識がみられない。そうした不統一のある面は認めるとしても、巻中・下では〈一――といふ（云）／事（言）〉が見出しの形式として抽出される。〈一――〉による箇条書き的な見出しの形式は、例えば『片言』にもみられ、〈一――といふ（云）／事（言）〉の形式は後の『世話重宝記』などにも見られるものである。見出しの形式に限っていえば、本書は整備された辞書というよりも作法書ないしは随筆的な性格が備わっているといえよう。その一方で見出しには〈○〉を欠く項目がみえる。これは、

一　濫觴　末の滴つもるの下に見えたり。　（上・二ウ）
一　良薬口にがしといふ事　見タリレ前ヘニ　（中・五オ）
一　積善の余慶といふ事　前の余慶の下に見えたり　（下・一六ウ）

のように、参照見出しに相当するものが〈○〉を欠いたまま一字分の空白をおく場合、〈腹立／機嫌／六借〉（上・三二オ）、〈毒薬変じて薬になるといふこと〉（中・二二オ）のように註文部分が空白になった場合が多く、「言葉部」「言態部」「諺部」では少数の例外[8]を除いては〈○〉が見出しに対応する註文の始まる記号として機能している。このほかに見出しの形式としては「言葉部」の目録には〈一　上戸　附下戸／一　上臈　附下臈／一　鍛錬　附錬磨／一　六根　附六塵〉のような形式がある。これに対応する本文は、

一　上戸　下戸　俗酒に付ていふ言葉。按ずるに白楽天が詩に猶嫌小戸ノ長先醒と註に、唐の世の人、酒を飲ことおほき物を大戸とし、小なるものを小戸とすと云り。但これに本づひて云か。然共上戸小戸と云時は其拠を不レ知。（上・四オ）
一　上臈　下臈○按ずるに蔡邕が独断に臈とは歳末の大祭にて、天子みづから先祖五祀を祭る日也。このとき農人を労て酒宴遊楽せしめ、ともに先祖をまつることを許すといへり。さる程に日本の俗これによりて、貴賤の品をわかたんために、或は上臈といひ、下臈といふか未審。（上・四オ～ウ）
一　鍛錬　附錬磨○二つともに、鍛冶の事によりていふ言葉。こゝろすこし隔あるにや。（上・九ウ）
一　六根　附六塵○眼耳鼻舌身意これを六根とし、色声香味触法を、これを六塵とす。仏教に出たり。（上・三一ウ）

となっており、註文は見出し文字の大きさにかかわらず、ほぼ対等の扱いをしていることが分かる。したがって、これらも見出し語に準じて扱うべきであろう。

（二）見出し語・目録の検討

それでは本書がどの程度の規模を有する辞書であるかをまとめておこう。その際に、ここまで無批判に扱ってきた目録についても見出しとの関連で検討することとする。

各部はそれぞれ本文に先立って目録を有する。しかし、本文に収載された語句の一覧を目的とすると考えられる目録記載の語句

が、実際には本文の見出しと完全には対応していない。本文の見出し語と目録記載語句の双方を数字で示せば次のように異なる。（括弧内は目録の件数）。

「言葉部」……一九五（一九四）
「言態部」……八八（八六）
「諺部」……六三（四四）
「附録」……二一（二一）　合計……三六七（三四五）

ただし、右のうち、巻中の目録にみえる〈命は食にあり〉は本文に立項されず、これを含めた延べ項目数は三六八となる。この中で「言葉部」は全体の約五三パーセントを占める。また、〈毛を吹て疵を求〉は本文で「諺部」に配されるのに対し、目録では「言態部」に置かれるといった齟齬（右では所属を本文を基準としてカウントした）もみられ、「言態部」と「諺部」の間には厳密な区別意識がはたらいていなかったこともうかがわせる。

本文の見出しからみれば目録全体では二二項目の欠落があり、特に「諺部」でその差が大きい。また、見出しと目録の形式的な差は「附録」に集中してみられる。例えば、目録で〈一　七月文月　七夕　夷則　盂蘭盆　相月〉とある部分を本文に求めると、

一　七月〇文月、この月七夕都鄙の児女みな詩歌文章の類を、牽牛織女にさゝげて、（中略）名といへり。又夷則又親月又相月。〇七夕今宵二皇の会は、桂陽城の武丁といひしもの（中略）あるときいひそめたる事とぞ。〇盂蘭盆、これは梵語こゝには倒懸救器と翻訳す。并に公事根元世諺問答に詳也

（下・二六ウ）

となっており、一項目中に複数の〈〇〉が表れ、実質的には〈〇〉直下の語に対する註文となっている。これらも見出しに準じて考えられ、〈又夷則又親月又相月〉はさらにその関連語を列挙した小見出しに相当するとみてよかろう。これは特に「附録」が二一項目のうち、〈正月〉から〈十二月〉までの異名、および暦日に関係する一五語をとりあげているからにほかならないが、このことによって「附録」が巻下の付録ではなく、本書全体にわたる補遺として位置づけられることも知り得るのである。本書はこうした準見出しあるいは小見出しに相当する語句が五七語存在するわけで、これまで含めると収載語句の規模は先の三六七項目よりは多くなる。

目録と本文の見出しの相違は量的なレベルだけではなく、

壁に耳あり→かべに耳
獅子ノ窟中に異獣なし→獅子窟中
提婆が悪も観音の慈悲→提婆の悪
智者はまどはず、勇者はをそれず→智者はまどはず
石の物いふ世のならひ→石の物いふ
堪忍の忍の字が百貫する→堪忍の忍の字
美人の終は猿になる→美人のおはり
北州の千年もかぎりあり→北州の千年

（矢印の上が本文、下が目録。〈～といふ事〉は省略）

のように、本文の見出しからみれば目録は成句の一部を独立させ、圧縮した形で示される俚諺のバリアントが少なくない。これらは「言態部」に一六例、「諺部」に一一例あり、巻中・下に集中して

いる。こうした本文中の見出しと目録との間の差はスペースの問題や目録作成が粗雑であったとする考えかたももちろんできようが、目録のように圧縮した形からでも読者は本文の見出し語を想起できたからであろう。これは俚諺の異形態ともいうべきもので、当時の俚諺に対する言語意識の反映と推測できるのではあるまいか。また、量的な差を考慮すれば、目録の性格は読者が収載語彙を一覧できるような本来的役割を担うものとしてだけでなく、著者が執筆しようとした項目の目安（手控え）が目録に転用されたという可能性もなくはないだろう。

（三）部立てと収載語彙の性格

本書には凡例がないため、その語彙の配列や分類に関しては方針が明確でないが、「言葉部」は冒頭から〈指南／五明／抑／恙無／権輿／濫觴／家督…〉と続き、主として漢字語[9]をまとめた部であるといえよう。しかし、配列に基準はみられず、〈無二安陪／無二甲斐／無二塩／乞二酸／無二旦暮／噬二臍〉のように返り点のあるものも含まれる。それでも一九四項目中、一七八項目（約九二パーセント）が二字の漢語、漢字語である。唯一仮名表記の〈こつへい〉（目録では〈滑へい〉）は『片言』に〈利口に口きゝ侍るを、こうへい、こへいなどいふは如何。坂東こと葉に、こつべいといふこと侍るが、此こうへいのことなるか。こつぺいとは滑稽のこと成べし〉とみえ、『斉東俗談』「凡言部上」に〈滑稽下学集ニ滑稽ハ利口之義也〉とみえる語で、漢語に由来する訛語として登録したものと考えられる。これは先に二で検討した著者の態度にかなう。この語に端的に表れるように、「言葉部」には日常語化した漢字語を収集したことがうかがわれる。こうした分類は筆者が先に考察した『斉東俗談』の編集方針と重なるところが大きい。[10]

一方、三（二）でみたように、「言態部」と「諺部」の区別は不明瞭で、〈悪事千里と云事／陰摩羅鬼といふ言／偕老同穴といふ事〉（「言態部」）、〈一字千金といふ事／優曇華といふ事／寸前尺魔といふこと／傍若無人といふ事〉（「諺部」）など、「言葉部」に含めてもよさそうな語や、〈芝蘭の友といふ事／断金の契と云言／蜘蛛の網といふ事／隙の駒と云事／綸言汗のごとしといふ事〉（「言態部」）のように表記のしかたによっては「言葉部」に含まれそうな句が散見して分類基準にあいまいな点がある。これらは広く俚諺という点でまとめられるようだが、「言態部」には他の見出し語とレベルの異なる〈梁塵秘抄の詞と云事〉が立項されていることも記しておく必要があろう。おそらく俗語収集を念頭において、世俗歌謡の宝庫たる『梁塵秘抄』をとりあげたのだろうが、他の項目は見出し自体の単語あるいは成句に註文を付すことから考えれば、見出し語としてはこの項だけがやはり異質である。しかし、概ね広義の俗語の中で、「言葉部」は漢字語、「言態部」「諺部」は俚諺を収集した部として二分できる。

四　見出し語の選定と先行文献

二でふれたように、著者の言をそのまま信用すれば、本書は約一か月程度で成立している。したがって、本書のよりどころと

なった文献を考えておく必要があろう。この場合、見出し語の選定に利用したと思われる文献と註文の執筆に利用した文献とに分けて考えるべきである。註文に利用した文献は引用というかたちで書名が記されるので比較的容易に知ることができる。頻繁に引用されるのは四書五経のほかに、『漢書』『文選』『翻訳名義集』『書言故事』といった代表的な漢籍が圧倒的に多く、『孔子家語』も引用の度合いが高い。また、『竹採翁物語』『伊勢物語』『平家物語』『徒然草』などもみえるが、間接的な引用もあると思われる。しかし、『下学集』のように利用価値の高い通俗辞書は本書中に一箇所だけ書名がみえるにすぎず、『節用集』はついにみえない。これは、引用というかたちでは使用しなかっただけで、見出し語の選定には大いに活用したと考えるのが妥当だろう。試みに、『元和三年版下学集』と『易林本節用集』に本書の見出し語を求め、両書と比較した結果を次に示すこととしよう。このことによって収載語彙の意味分野を考える目安にもなるであろう。

『下学集』では本書の見出し語と直接関係する見出し語[11]は全体で一一二例あり、「言葉部」では九六例、「言態部」「諺部」「附録」で各五例を見いだすことができる。辞書の性格上「言葉部」に集中するわけだが、このうち態芸門が五三例、言辞門が三一例と多数を占める。以下は畳字門が八例、数量門が六例と続くが遠く及ばない。

同様に『節用集』でも確認してみると、直接関係する見出し語は全体で一五八例あり、『下学集』を上まわる。「言葉部」が一三二例、「言態部」が四例「諺部」が八例、「附録」が一四例となり、集中の度合いは『下学集』と同様である。「言葉部」にはやはり言辞・言語門が一〇九例と多く、続くのは人倫門の一一例、数量門の四例である。

右の結果で「言葉部」には一九四例のうち、『下学集』の態芸門と言辞門に所属する語彙[12]が約四三%含まれていることになる。『節用集』では一層傾向がはっきりし、言語・言辞門所属の語彙が約五六%で半数を越える。この結果からも「言葉部」は『元和三年版』『易林本』とは特定できないにせよ、『下学集』、『節用集』の類を大いに参考にしたと考えられる。「言葉部」という名称は所属語彙の意味分野にかなう命名であったといえよう。

次に、「言態部」「諺部」についてはどうであろうか。先行するまとまった俚諺集としては『毛吹草』『世話焼草』(『世話尽』とも)を挙げなければならないが、これらを右と同様に見出し語の比較をすればよいわけだが、俚諺の場合、単語レベルの漢字語と異なり、バリアントが豊富な為に比較がかなり困難である。そのため、一つの目安として成句どうしの用字、仮名遣いなどの相違は捨象することとし、次のような基準を設けた。

A：成句が一致するもの(例：女に家なし／をんなに家なし)

B：成句の一部に語形、活用形、音便などの違いがあるもの(例：色を見て悪をさす／いろを見てあくをさせ、石をいだひて淵に入／石をいだきてふちに入)

C：成句の内容は一致しているものの、Bレベル以上の相違があるもの。(例：井の内の蛙／井のうちのかへる大かいをしらず、槃特が愚痴も文殊のちへ／もんじゆのちゑはんと

くがぐち）

これによって、『毛吹草』（第二巻「世話付古語」）と『世話焼草』（第二巻「曳言之話」）を本書の見出し語と比較する。「言態部」「諺部」を合わせて示すと、『毛吹草』において、Aは二八例、Bは二一例、Cは一二例で、合計は六一例である。一方、『世話焼草』はAが六九例、Bが一六例、Cが一六例で、合計は一〇一例である。本書の「言態部」「諺部」の見出し合計は一五一であるから、『世話焼草』にみえる俚諺が「言態部」「諺部」にはAレベルでも約四七パーセント、Cレベルまで広げると約六七パーセント含まれていることになる。この結果によってただちに本書「言態部」「諺部」の素材が『世話焼草』であると即断するわけにはいかないが、少なくとも『毛吹草』に比べれば『世話焼草』を参照した可能性の高いことが指摘できる。[13]

このように、先行文献との比較によっても、「言葉部」と「言態部」「諺部」とでそれぞれ参考に供したであろう文献は異なり、それがそのまま各部の名称・性格にも反映したと考えられるのである。

おわりに

以上、『世話支那草』の構造と語彙の性格を考えてきた。本書が俚諺に注釈を施した最も早い時期の文献であることはすでに加藤定彦が指摘するとおりだが、俚諺の収集につとめた『毛吹草』『世話焼草』などの俳諧作法書と、俗語の中でも特に漢字語に対して注釈を施す『斉東俗談』のようなものの間にあって、本書は成立時期においても、辞書の部立てからみても俚諺辞書と俗語辞書の中間的な位置にある。これが元禄期の『諺草』に至ると、いろは分けの下位分類として「諺」「俗語」「正訛」の三分類が行われ、辞書としては一層整備された構造となるが、本書にはそうした分類方法の萌芽をみることができる。そうした後続文献との関連も視野に入れて、近世初期に矢継ぎ早に刊行された広義の俗語辞書群がどのような構造の変化をたどり、どのような語彙を登録していったかという流れを明らかにしていく必要があろう。そのような考察の積み重ねが概念として不安定な俗語の姿を明らかにすることになるのではないだろうか。

※引用にあたって、仮名遣いはそのままとしたが、漢字を通用字体に改め、ルビは必要箇所以外で省略したところがある。

註（1）加藤定彦・外村展子『俚諺大成』（平成元（一九八九）年　青裳堂書店）

（2）「日本語学」VOl.10.No.12（平成三（一九九一）年一二月　明治書院）

（3）木村義之『斉東俗談の研究――影印・索引――』（平成七年（一九九五）年　おうふう）二五二、二八四頁。

（4）木村義之「『世話支那草』と『斉東俗談』」（平成六（一九九四）年一一月二六日　語彙・辞書研究会発表要旨）

（5）同一の版木であることはすでに加藤定彦が『日本古典文学大辞典』「世話支那草」の項で指摘しているが、今回筆者が披閲した文献の書誌的特徴を改めてまとめておく。

①国会図書館寛文四年版（函架番号：126-39）は一冊本で紙数は巻中を欠くため墨付き八〇丁のみである。

③東洋文庫蔵（函架番号：貴三・E・28）は三巻三冊で、題簽は貼り題簽で子持枠の中に、「世倭支那草　上」「世話品草　中」「勢和志那草　下」とあり、表紙は藍色。ただし、巻上一五～一六丁にかけて、破損がある。

④東京国立博物館徳川文庫（函架番号：010・と6326・3-1～3）は三巻三冊で題簽は、巻上が貼り題簽のはがれあとがあり、巻中は「世話品草」までがあるが以下は破損、巻下は「勢和志那草」とあり以下が破損。巻頭に〈洒竹文庫〉の印があり、刊記は〈宝永四年丁亥正月吉祥日　京堀川通松原上ル町　八尾清兵衛〉とある。

⑤国会図書館（函架番号：210-94）は一冊本で、本文に関しては②に次いで状態がよい。ただし、目録が巻上本文の前に上・中・下が一括して綴られている点が他と異なる。また、木口には〈一・二・三・四〉と墨書され、原装が四冊本であったことを知らせる。

（6）斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成（一）（二）』（昭和三七、八〈一九六二、三〉年　井上書房）による。

（7）日本古典全集『書目集　続』（昭和一二〈一九三七〉年）、および国会図書館蔵の新写本（函架番号：128-213）による。

（8）参照見出しに準じるものには、〈一　琢磨〇前におなじ〉が〈一切磋〇詩経の字。又大学に見えたり。註に詳なり〉を指す例や、〈一　墨に交者はくろしといふ事〇同前〉のように、直前の項目を指す場合は例外。また、〈一　口惜〇　〉のように、註文のない場合が一例ある。

（9）杉本つとむ『文字史の構想』（平成四〈一九九二〉年　萱原書房）所収の「日本の〈漢字〉とその本質」、「〈宛字〉の論」で規定された概念である。本書の「言葉部」の見出し語群からもわかるように、当時の言語意識からすれば、語種よりも使用字種による分類意識のほうが優先すると考えられ、これらの資料を観察する際には漢字語の概念が有効であろう。

（10）註（1）二六三～二七〇頁。

（11）〈直接関係する〉とは、本書と『下学集』で漢字表記・ルビとも に一致するもののほかに、『世話支那草』で〈左礼〉に〈ザレ〉とルビのあるものが、『下学集』で〈ジヤレ〉とあるものや、『世話支那草』〈五月の子はやしなはず〉とあるものが、『下学集』で〈五月子不養〉とあるものなど、意味・内容が密接な関係をもつものを指す。

（12）杉本つとむ『増補下学集』の構成と語彙』（昭和五六〈一九八一〉年『辞典・事典の世界』桜楓社　所収）によれば、『増補下学集』の態芸門と言辞門はほぼ同列に考えられているという（一五七頁）。『増補下学集』は本書成立以後の寛文九年刊だが、語彙の分類意識において同時代性を求められると思う。

（13）鈴木棠三『続故事ことわざ辞典』（昭和三三〈一九五八〉年　東京堂）の解説によれば、『毛吹草』と『世話焼草』はそれぞれ俚諺の数が七〇〇項目を越え、その重複するものは約三三〇項目である（四四三頁）という。

参考文献（注で扱ったものは除く）

貝原好古　『諺草』（元禄一四〈一七〇一〉年刊　早稲田大学蔵本）
橋本進吉解説　『易林本節用集』（大正一五〈一九二五〉年　日本古典全集）
新村出校閲　『毛吹草』（昭和一八〈一九四三〉年　岩波文庫）
山田忠雄解説　『元和三年版　下学集』（昭和四三〈一九六八〉年　新生社）
吉田澄夫編　『かたこと』（昭和四七〈一九七二〉年『近代語研究第三集』　武蔵野書院）
米谷巌解説　『世話焼草』（昭和五一〈一九七六〉年　ゆまに書房）
小林祥次郎解説　『世話重宝記』（昭和五一〈一九七六〉年『近世文学資料類従参考文献編8』　勉誠社）
加藤定彦編　『初印本　毛吹草　影印編』（昭和五三〈一九七八〉年　ゆまに書房）、『同　索引編』（昭和五五〈一九八〇〉年）